

# 古楽器・各種ギターの世界作家 石井栄さん(75)

読売新聞オンライン 2022/10/31 05:00



(信州人メイン写真<1>)工房で黙々と作業を進める石井栄さん(上田市)＝浅野好春撮

## 弦楽器づくり半世紀

「楽器作りはゴールのないマラソンレースのようなもの。作っても作っても、必ず不満が残ります」

――。

クラシックギターからバロックギター、ビオラ・ダ・ガンバ(脚ではさんで構える弦楽器)などの古楽器まで、50年にわたり、弦楽器を作り続けてきた。「出来栄えに100%満足した作品は、これまで一つもありません。楽器を作る職人なら、みな同じではないでしょうか」

大学卒業後、大阪で1年半ほど和食の料理人を務めた。その生活にふと疑問を感じ、貯金を使って約4か月間、欧州を旅行。そのうち2か月をスペインで過ごし、ギター職人が多く住むグラナダで工房兼店舗を訪れ、職人と出会ったことが転機となった。

幼い頃から洋裁を手掛けていた母親の「ものづくり」を間近に見ていた経験、高校時代の選択科目「工芸」で肘掛けいすを作って教師に褒められた思い出などが走馬灯のようによみがえり、「自分はものづくりが好きだったんだ」と気づく。土産として、グラナダの店でフラメンコギターを買い求めた。

帰国後、ギター雑誌を見ていたら、偶然「ギター職人弟子募集」の広告が目飛び込んできた。すぐに応募し、東京都町田市の工房で働き始めた。兄弟子は、現在米シカゴ在住の著名なバイオリン製作家・松田鉄雄さんだった。工房に10年ほど勤め、1984年に独立。現在の上田市真田町本原に自身の工房を構え、今日に至っている。



設計図がなく見本のギターを頼りに  
完成させたポルトガルギター

クラシックギターを中心に様々なギターを製作してきた。7弦のロシアギター、12弦のポルトガルギター、中南米の民族音楽で使われるレキントギター(アルトギター)なども手掛けた。リュート奏者・つのだたかしさんからバロックギターの製作を頼まれたのを機に、製作範囲が古楽器にも広がり、ビオラ・ダ・ガンバを作ることもつながった。

今では「ギターよりも古楽器のほうに製作意欲の半分以上が傾いている」という。設計図がなかったポルトガルギターは、現物を見本に独力で製作した。そのスキルの高さを学ぶため工房の門をたたき、独立していった弟子は11人を数える。

弦楽器製作人生に一区切りつけようと、今月16日まで、東御市文化会館で自身の製作した楽器約35点を展示、演奏する「音の形 手工弦楽器展&コンサート」を開催。展示を終え、これからは、「年齢、体力に合わせた生き方をしようと考えているんですよ」とも語る。ただ、確かな腕を頼って楽器修理の依頼は次々と舞い込む。そうした仕事は、体力と気力が続く限り、受けていくつもりだ。

(浅野好春)

◇いしい・さかえ 1947年、上田市生まれ。東京教育大学(現・筑波大)農学部林学科卒。1972年にギター職人となり、84年独立。趣味はゴルフと楽器演奏。「佐久古楽合奏団」で演奏も楽しむ。欧州旅行中に出会った妻と2人暮らし。